２．分布調査の方法と経過

１．既往の調査と研究

夜久野末窯跡群は早くから須恵器生産地として認識されており、1966年の時点では20基程度の窯跡が確認されている（京都府天田郡夜久野町教育研究会1966）。その後、中川淳美氏や衣川栄一氏らの調査を通して窯跡の数が増大し、1976年に杉原和雄氏が紹介した折には、44基の窯跡が記されている。この時の成果はその後、いくつかの文献にも掲載され、次第に夜久野末窯跡群が大規模須恵器生産地として認識されるようになった。夜久野町の刊行物にも44基の窯跡が報告されており、広範囲に窯跡が存在していたことが地図によって示されている（夜久野町教育委員会1981）。また、夜久野末窯跡群で生産された須恵器の供給先に関しては、夜久野町大油子に所在する荒堀遺跡が候補地として挙げられている（夜久野町教育委員会1981）。なお、1987年に刊行された『京都府遺跡地図〔第２版〕』では、38基の窯が地図上で示された（京都府教育委員会1987）。

1992年に実施された高内鎌谷遺跡の発掘調査では、古墳時代の竪穴住居跡や平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡が発掘されるとともに、奈良時代の窯跡に伴うとされる灰原が調査区の西側と東側の２カ所で検出された（夜久野町教育委員会1994）。東側灰原の出土遺物は７世紀末葉から８世紀初頭と、９世紀末葉から10世紀前半に比定されたものが混在しており、複数の窯に伴う灰原と推測されている。この発掘調査で新たに９世紀末葉以降の土器が採集されたことから、今まで奈良時代までと考えられてきた夜久野末窯跡の操業時期が、平安時代後期頃まで下ることが確認された。また、夜久野町では1990年に発掘調査された末５号窯（関垣４号窯）が1997年に報告され、窯体についての初めての発掘調査報告となった。（夜久野町教育委員会1997）その後、町

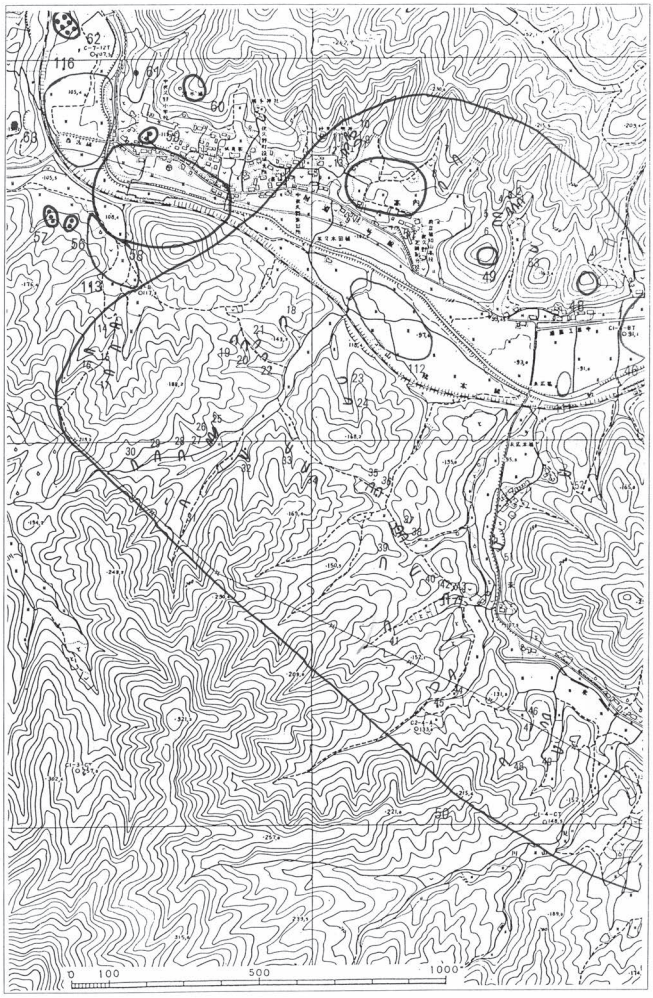


図１　『京都府天田郡夜久野町遺跡地図』の末窯跡群分布図
（図中の番号は、それぞれ末〇号窯に対応）

では『京都府天田郡夜久野町遺跡地図』を刊行したが、その時点では53基の窯が地図で明示されている。なお、この段階では末１号窯から53号窯というように付番されている（図１）。

近年、東昭吾氏によって踏査がおこなわれ、過去に報告された窯跡の分布が再確認されたほか、新たに多数の窯跡が発見された。これにより夜久野末窯跡群の窯跡数が従来確認されていた窯跡数から大幅に増加し、合計143基の窯を有する北近畿最大級の須恵器生産地であることが判明した。さらに窯跡数の増加による窯名の混同を避けるため、小字名を基本とする16支群に分けて名称を再交付し、以前の窯の番号と対応も一覧表によって明示した（東2018）。　（梅野留美子）

２．分布調査の経過と成果の概要

2019年度よりACTRの採択を受けて着手した今回の調査について、年次ごとに経緯を記すことにしたい。

2019年度　実地調査に先んじて、夜久野末窯跡群の窯跡が分布する地域の小字地名を福知山市教育委員会の協力を得て調査した。また、福井亘研究室において国土地理院が公開している地形図を加工し、小字地名との対比をおこない、それぞれの窯跡についての正確な地名表記ができるように準備した。夜久野末窯跡群の実地調査を、2020年２月９～11日の日程で実施した。研究協力者の福知山市文化・スポーツ振興課の職員とともに先述した東昭吾氏の案内を得て、現地の窯跡を踏査し、GPSによる位置の記録、そして写真撮影と見取り図を作成し、窯跡の可能性のある地点について一つずつ

写真１　窯跡調査風景（2020 年度）

写真２　調書の作成風景（2022 年度）

写真３　地質調査風景（2020 年度）

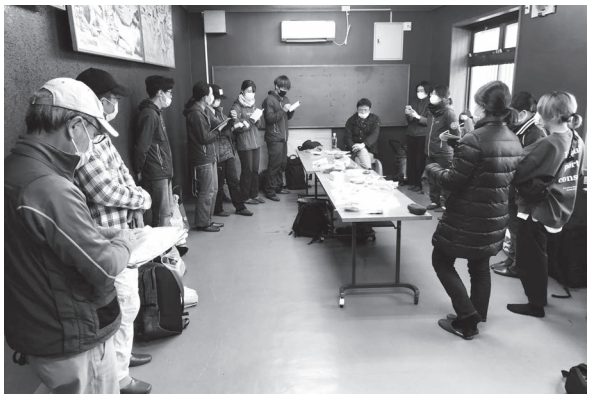


写真４　資料の検討風景（2021 年度）

調書を作成した。採集した遺物は持ち帰り、その後に整理をおこなった。この年の調査では、40地点ほどの調書作成を終えることができた。

2020年度　　まず、８月に夜久野町化石・郷土資料館において、窯跡群の採集資料や古墳出土資料について検討し、これまでの調査状況を把握することをおこなった。窯跡の実地調査は、年が明けて2021年３月８～10日の日程で実施した。研究協力者の福知山市文化・スポーツ振興課の職員とともに、東昭吾氏の案内を得て、現地の窯跡を踏査した。この調査には、地質の専門家である小滝篤夫氏も同道し、窯跡が集中する地点を中心に地質の特徴について検討をおこなった。

2021年度　　前年度までに調査を終えた窯跡群について、窯跡ごとの調査書（窯跡カルテ）を作成し、採集した遺物の整理を進めた。そして、その補足の調査としての実地調査を、３月１日～２日の日程で研究協力者の福知山市文化スポーツ部の職員とともに、東昭吾氏の案内を得て実施した。その結果、現存すると思われるほぼすべての窯についての調書を完成させた。また、窯跡の新規発見も相次ぎ、昨年度の発見と合わせて７基ほどの窯跡を加えることができた。

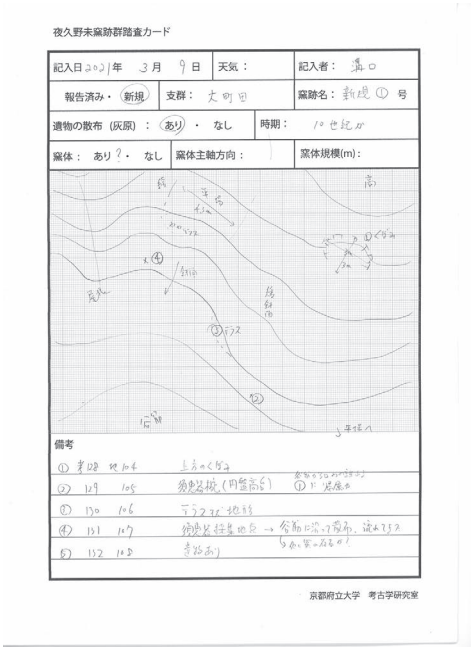
12月５日と６日には、研究分担者の佐々木尚子氏と小滝篤夫氏を中心に、窯跡群の中心部の耕作放棄田においてボーリング調査を実施した。この資料の^{14}C年代測定法による年代測定や岩石類の組成分析など、自然科学的な調査を進めた。

窯が築かれた背景として地質上の特徴も検討の対象としたが、昨年度からの小滝篤夫氏による分析の結果、はんれい岩を中心とする地質の分布範囲と窯跡の範囲が一致することが明らかとなり、風化しやすいはんれい岩によって生まれた傾斜が緩い丘陵を好んで窯が設けられていたことが判明した。また、植生の変化を明らかにすべくボーリング調査と花粉分析を窯跡の中心部で実施したが、堆積物の年代については^{14}C年代測定法に加えて、須恵器の破片が含まれることから、良好な年代決定のサンプルになることがわかった。

2022年度　　これまでの調査成果をまとめるため、11月には報告書で使用する窯跡群の写真撮影をおこなった。また、良好な炭化物が採集されたので、これについて樹種同定と年代測定をおこない、燃料材に対する分析を開始した。昨年度のボーリング調査によって得られていた花粉についての分析についても佐々木尚子氏によって進められ、窯跡と森林環境の関係を知るための基礎データが得られた。

分布調査の成果を地元に報告するため、３月11日に中夜久野公民館において「ここまでわかった！うつわの里中夜久野」と題する報告会を実施した。その翌日にも窯跡の現況を確認するため、分布調査を実施している。

2023年度　　報告を作成するため、採集遺物の整理を進め、実測図の作成を集中的におこなった。夜久野町化石・

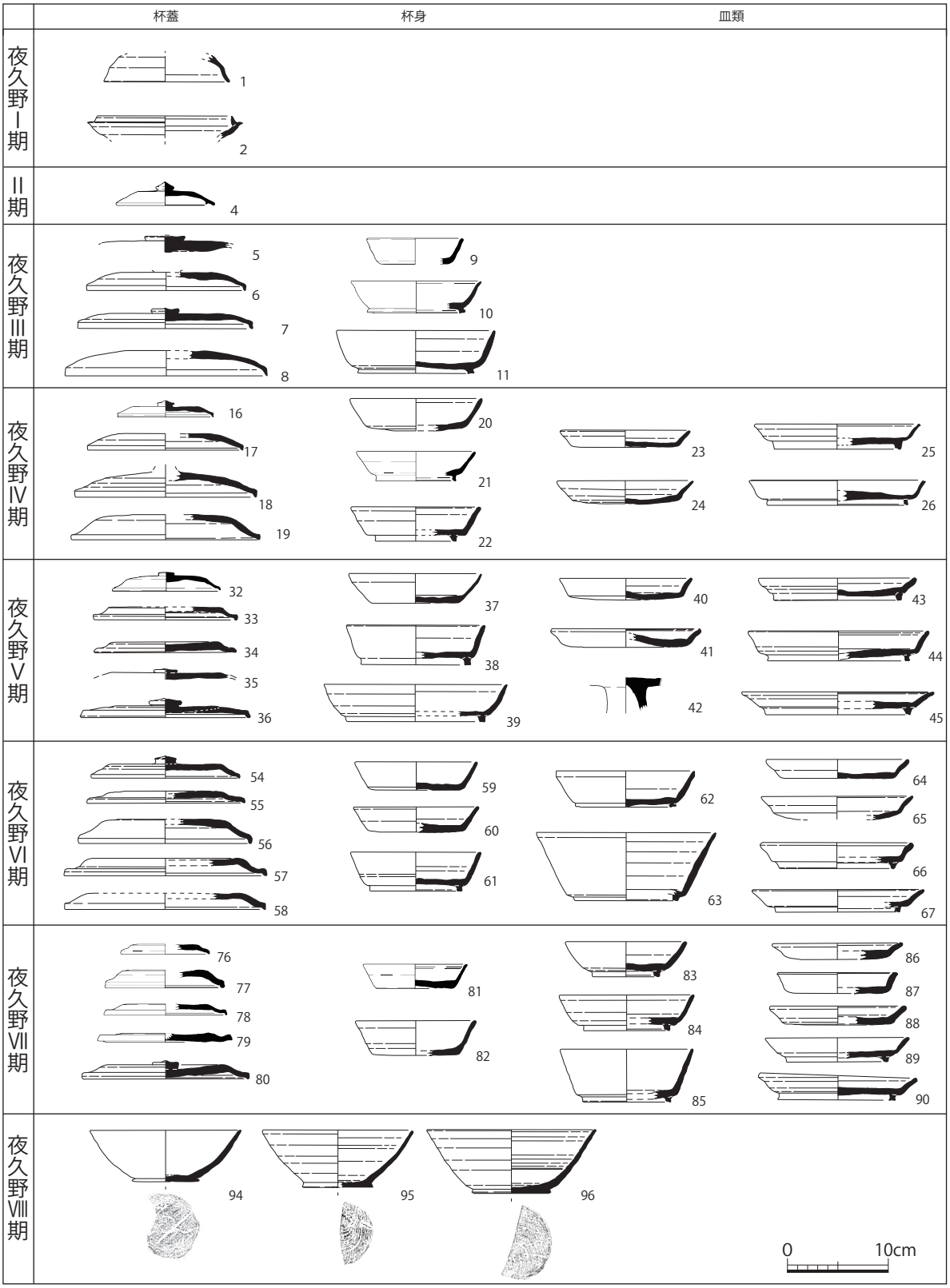

夜久野未窯跡群踏査カード

記入日 2021年 3月 9日	天気：	記入者：	
報告済み・（新規）	支群：	窯跡名：	号
遺物の散布（灰原）：（あり）・なし		時期：	
窯体：あり ?・なし	窯体主軸方向：	窯体規模(m)：	

備考

京都府立大学　考古学研究室

図２　作成した調書



関垣７号窯 :1~3　トウデン８号窯 :4　鎌谷６号窯 :5,6　鎌谷４号窯 :12　トウデン９号窯 : 7　トウデン４号窯 :8~11,13~15　高内親谷７号窯 :16,22,25,27,30
末親谷９号窯 :17~20　末親谷 18 号窯 :21　関垣３号窯 :23,24,31　末親谷 18 号窯 :26,28,29　高内親谷 13 号窯 :32,33,39,43　高内親谷 17 号窯 :34,38,46,48,51,53
末親谷 14 号窯 :35,37,50,52　高内親谷 36 号窯 :36　末親谷７号窯 :40,42~45,47,49　高内親谷６号窯 :41　高内親谷９号窯 :54,55,58~65,67~69　高内親谷 33 号窯 :56
広畑２号窯 :57,66,71　畑ヶ谷４号窯 :70,72　畑ヶ谷３号窯 :73,74　山ノ口１号窯 :75　ナゲ１号窯 :76~78　ナゲ７号窯 :79,82,91　ナゲ８号窯 :80,81,84,88~90,92
ナゲ４号窯 :83　畑ヶ谷 15 号窯 :85~87,93　大町田６号窯 :94　大町田２号窯 :95,~97,99　大町田１号窯 :98

図３　夜久野須恵器編年（1）

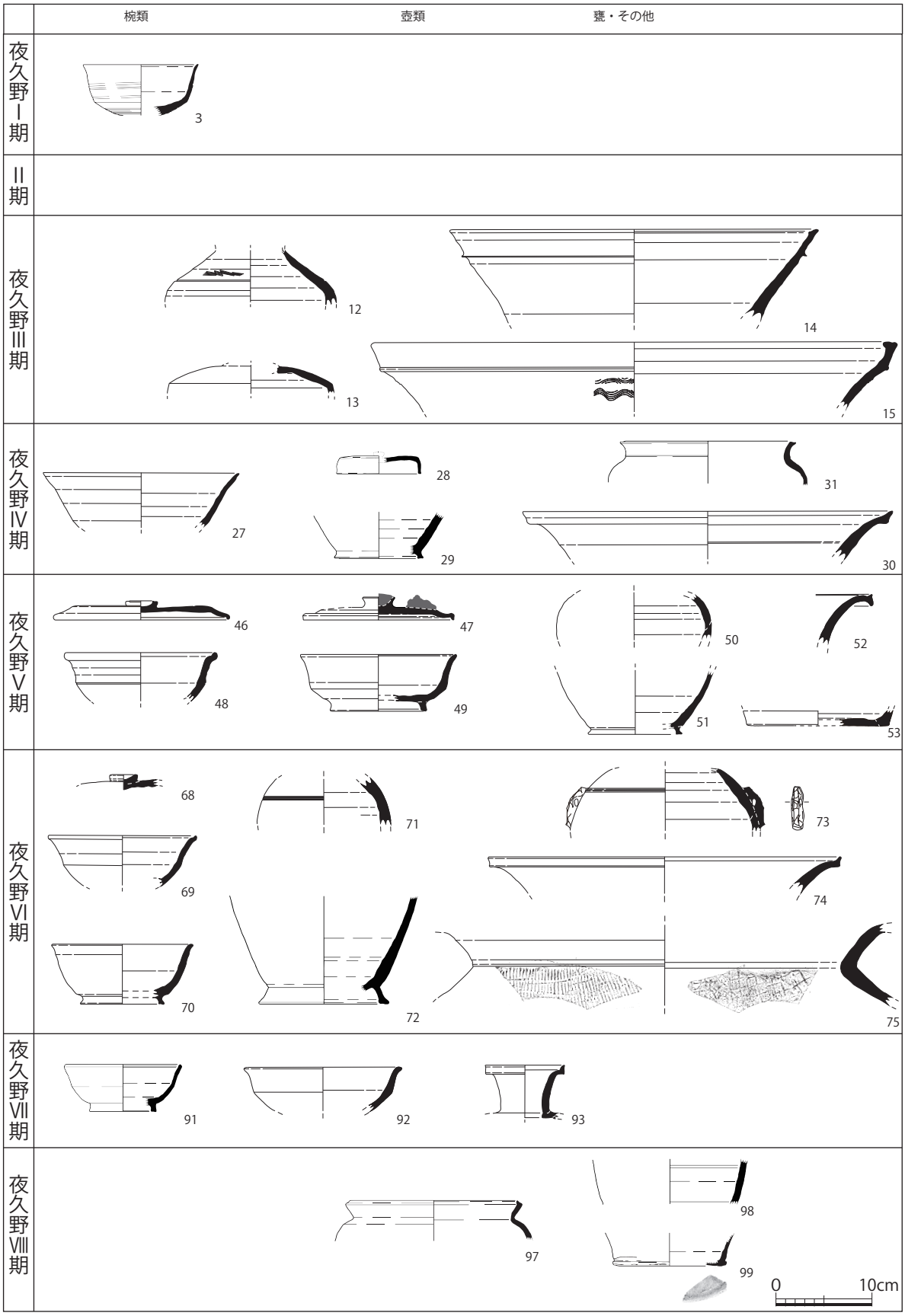


図４　夜久野須恵器編年（２）

表１　年代の並行関係

<table>
<tr><th>東2018</th><th>稲本2023</th><th>神野2005・小森2005</th><th>編年案</th></tr>
<tr><td>末Ⅰ期ａ</td><td rowspan="3"></td><td rowspan="2">飛鳥Ⅱ</td><td rowspan="2">夜久野Ⅰ</td></tr>
<tr><td>末Ⅰ期ｂ</td></tr>
<tr><td>末Ⅱ期ａ</td><td>飛鳥Ⅲ・Ⅳ</td><td>夜久野Ⅱ</td></tr>
<tr><td>末Ⅱ期ｂ</td><td rowspan="2">丹波Ⅰ期</td><td rowspan="2">平城Ⅰ（飛鳥Ⅴ）</td><td rowspan="2">夜久野Ⅲ</td></tr>
<tr><td>末Ⅲ期ａ</td></tr>
<tr><td>末Ⅲ期ｂ</td><td>丹波Ⅱ期</td><td>平城Ⅱ～平城Ⅲ古</td><td>夜久野Ⅳ</td></tr>
<tr><td>末Ⅲ期ｃ</td><td>丹波Ⅲ期</td><td>平城Ⅲ新～平城Ⅳ</td><td rowspan="2">夜久野Ⅴ</td></tr>
<tr><td>末Ⅳ期ａ</td><td rowspan="3">丹波Ⅳ期</td><td rowspan="3">平城Ⅴ期</td></tr>
<tr><td>末Ⅳ期ｂ</td><td rowspan="2">夜久野Ⅵ</td></tr>
<tr><td>末Ⅳ期ｃ</td></tr>
<tr><td>末Ⅴ期</td><td rowspan="6"></td><td rowspan="4">京Ⅱ期</td><td>夜久野Ⅶ</td></tr>
<tr><td>末Ⅵ期</td><td rowspan="3">・
・
・</td></tr>
<tr><td>末Ⅶ期</td></tr>
<tr><td>末Ⅷ期</td><td rowspan="2">京Ⅲ期</td></tr>
<tr><td>末Ⅸ期</td><td>夜久野Ⅷ</td></tr>
</table>

郷土資料館の展示リニューアルを目的に、まず５月に夜久野を訪れ、窯跡の分布調査の補足と資料館の現況を調査した。12月15日～16日には、炭化材の採取を目的に窯跡群の分布調査をおこない、合わせて資料館の具体的な展示計画について、福知山市文化・スポーツ振興課の職員を交えて学生を主体として検討をおこなった。（菱田哲郎）

３．夜久野末窯跡群の年代と編年について

夜久野末窯跡群は関垣地区における７世紀前半を初現とし10世紀初頭にかけて長期間にわたり操業していた窯跡群である。そのうち、９世紀初前葉にあたる窯は確認できるものの、以後９世末までの窯跡は確認できず一時的な空白期間がある。この空白期間を経て、９世紀末から10世紀初頭に短期間の再稼働が確認でき、２時期に操業期間が分かれる。

夜久野末窯跡群の既往の須恵器編年としては、『マムシ谷窯址発掘調査報告書』（同志社大学校地学術調査委員会1983）において白鳳期から平安期にかけての５期に分類する記述がみられる。また、東昭吾氏が６型式８段階に分類しているほか（東2018）、稲本悠一氏が奈良時代の丹波地域における須恵器編年を検討し４期に分類しており、末窯跡群の一部の窯跡を指標としている（稲本2023）。

本稿ではこれら既往の研究を参照し、夜久野末窯跡群の須恵器を形態や調整の変化、器種構成の違いから夜久野Ⅰ期～Ⅷ期に大別をおこなった（図２・３、表１）。

夜久野Ⅰ期

末窯跡群内で確認されている窯跡で最古段階に位置する。本報告の関垣７号窯や東報告関垣４号窯を指標とする。古墳時代以来の伝統的な杯Hを焼成する。杯蓋は口縁部が外反する。杯身は口縁部を外反させる。受け部の先端を尖らせ、口縁部より高くなる。東編年の末Ⅰ期に対応する。７世紀前半に比定できる。

夜久野Ⅱ期

トウデン８号窯を指標とする。内面にかえりを有する杯Gの蓋がみられる。天井に宝珠つまみを貼付ける。東編年の末Ⅱａ期に対応する。７世紀後半に比定できる。

夜久野Ⅲ期

トウデン４号窯を指標とする。杯蓋は体部が湾曲し、端部をつまみ出す。一部、内面に形骸化したかえりが付くものもある。杯は底部から体部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁部を外反させる。高台は外に踏ん張る形態をなす。波状文を頸部に施す甕など古墳時代的な要素を残す器種がみられ、壺は肩部が張る。東編年の末Ⅱｂ～Ⅲａ期、稲本編年の丹波Ⅰ期にあたる。7世紀末～８世紀初頭に比定できる。

夜久野Ⅳ期

末親谷９、18号窯を指標とする。杯蓋は体部にわずかに屈曲をもつ形態がみられるようになり、口縁端部の側面に明瞭な面をなす。かえり付きの蓋は消失する。杯身は底部外縁より内側に薄く垂直に落ちる高台を貼付ける。東編年の末Ⅲｂ期、稲本編年の丹波Ⅱ期にあたる。８世紀前半に比定できる。

夜久野Ⅴ期

高内親谷17号窯、末親谷７号窯を指標とする。稜椀や皿が新たな器種として登場する。杯蓋は天井部から体部にかけて明瞭な屈曲がみられるようになる。皿は体部が直線的に開くタイプと口縁部付近を外反させるタイプがある。稜椀は稜部の屈曲が明瞭で、体部が直線的に立ち上がる。外に踏ん張る高台をなし、壺類は肩の張りが弱くなる。東編年の末Ⅲｃ、Ⅳａ期、稲本編年の丹波Ⅲ、Ⅳ期に対応する。8世紀後半に比定できる。

夜久野Ⅵ期

高内親谷９号窯、日ノ本北３号窯、広畑２号窯や畑ヶ谷３号窯を指標とする。器形の小型化の傾向がみられる。杯蓋は肩が張って稜をもち体部の屈曲が強くなる。つまみを持たない蓋が出現する。杯身は体部の傾斜が緩くなり、高台を外傾させて貼付けるものもみられる。また、器高の高い杯身がみられるようになる。皿は体部の屈曲が強くなる。東編年の末Ⅳｂ、ｃ期、稲本編年の丹波Ⅳ期にあたる。８世紀末に比定できる。

夜久野Ⅶ期

畑ヶ谷15号窯やナゲ１、８号窯を指標とする。杯蓋は器高がより低くなる。広い天井部に体部の屈曲が顕著にみられ、口縁端部をわずかにつまみ出し丸くおさめる。杯身は体部の開きが強くなり、

底部外縁に高台を貼付ける。皿は口縁部が外反するヘラ切り後の調整があまく、ナデ調整の省略など全体的に粗雑なつくりである。東編年の末Ⅴ期が該当する。９世紀前葉に比定できる。

夜久野Ⅷ期

平高台の椀が生産される時期である。大町田地域で主に生産がみられる。大町田６号窯ではヘラ切りの平高台椀が確認できることから、糸切りの平高台がみられる大町田１、２号窯に先行すると考えられる。東編年の末Ⅸ期にあたる。９世紀末～10世紀初頭に比定できる。（井川瑞季）

参考文献

東　昭吾 2016『鴨庄古窯跡群詳細調査報告書（1）－鴨庄古窯跡群詳細分布調査報告－』

東　昭吾 2018『末窯跡群詳細調査報告書（1）－末窯跡群詳細分布調査報告－』

稲本悠一 2023「奈良時代の地方における須恵器生産の展開－丹波国と周辺の諸窯を事例として－」『洛北史学』第25号

京都府天田郡夜久野町教育研究会 1966「土器と陶窯址」『郷土夜久野歴史篇　付地誌篇』

神野　恵 2005「第３章 出土遺物 ３－１－３ 土器類」『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ－兵部省地区の調査－』奈文研学報第70冊

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～19世紀－』京都編集工房

同志社大学校地学術調査委員会 1983『マムシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会調査資料 14

兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1991『鴨庄古窯跡群（２）－上牧２・７・８号窯－』兵庫県教育委員会

夜久野町教育委員会 1981『京都　夜久野の文化財』

夜久野町教育委員会 1994『高内鎌谷遺跡発掘調査概報』

夜久野町教育委員会 1997『末５号窯発掘調査概報』

夜久野町教育委員会 1999『京都府天田郡夜久野町遺跡地図（補訂版）』

夜久野町史編集委員会 2006『夜久野町史』第二巻（資料編）福知山市

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。（も）

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下　：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

（以上、菱田撮影）

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

（栗山雅夫氏撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編　集　菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）
　　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
　　〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2024年3月29日
印　　刷　北斗プリント社
　　〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2